

海外出張 ― スイス・オランダ ―

野瀬 隆平

造船所への技術援助について、やっと合意に達する。

イタリア側の交渉相手である公社の総裁が、お祝いの会食に招待してくれた。スペイン広場の階段の上にあるホテルのレストランだ。俳優のような立派な顔立ちの総裁が乾杯の音頭をとって食事が始まる。3ヶ月にも及ぶ長い交渉の結果たどり着いただけに、冷えた白ワインがことさら美味しい。

契約調印は、税金の関係もありスイスで行うという。政府の一部門である公社が節税するのも何か変な感じがした。イタリアとの国境に近いルガノ湖のほとりにたつホテルで署名することになった。

お偉いさん達は、この造船所で船を建造する予定の船主が持っている小型ジェットで、我々は車でフィレンツェ、ミラノを経由して、それぞれルガノへと向かう。汽車の旅は、時間は掛かるが景色を眺めながらなので、雲の上を飛ぶより良い。

調印も無事終了。あとは日本へ帰るだけだが、ロッテルダムに立ち寄ることにした。契約ネゴの間、東京とのテレックスによる連絡の中継地となっていたのが、ロッテ事務所であった。イタリアとは電話でやり取りし、ロッテと東京は専用回線を使っていたのだ。そのお礼かたがた訪れたのである。

そのロッテで貰ったお土産は、なんと「数の子」である。オランダでもニシンを獲って食べるが、その「子」はすべて捨てている。数の子を珍重する日本人がこれを見逃すわけではない。安く手に入れて食していたが、その数の子をおみやげに戴いたという訳だ。

さて、いよいよ懐かしの日本へと飛ぶ。12月24日の夜にアムステルダムを発つKLMの便にした。機内に入って見ると席はガラガラ。クリスマス・イヴの夜は家族と共に家で過ごすのが一般的であるヨーロッパの人達にとって、あえてこの日に海外に行かないのは当然なのであろう。

その分だけ、スチュワーデスの手厚いサービスを受け、長かった出張中の日々を思い返ししながら、一人でよく冷えたシャンパンを飲みはじめた。